
ピース オブ ブレイブ

スダ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ピース オブ ブレイブ

【Nコード】

N0072I

【作者名】

スタ

【あらすじ】

西暦が終わって、人は滅び、変わりにクロノという種族が生きる世界。誰が人類を滅亡させたかって？それはね……地球だよ。

ブローグ 諸人（もろびと）、滅びて（前書き）

S Fロボット物に、したいのです

ブローグ 諸人（もろびと）、滅びて

人類が滅ぼされようとしている。

地球に滅ぼされようとしている。

地球は信じられないほど強く。

私たちも戦ったが全滅させられた。

私のブレイブは、もう動かない。

そして僕も長くないだろう。

唯一生きている通信機能では、ルナストファリウスが攻撃されていることを知った。

妻の弥生も娘の紗奈も死んでしまうのだろうか。

それが滅亡すると言ったことだ。

人が滅びた後は、誰が世界を動かすのだろうか？

獣だろうか？

神だろうか？

どうでもいいか。

どちらにせよ。

私には関係ない。

クロノ番号 J108A - 306

サウザーの日記より抜粋

第一話 クロノ

西暦という暦があったことを皆さんは知っていますか。

西暦が終わったのは今から約1000年前と言われています。

一説によると、その最後の年は2080年だったとも言われています。

まあ定かではありませんがね。

何故、西暦が終わったのか皆さんは知っていますか？

人が神であるアースと戦争をし、破れたからです。^{ヒューマン}

この戦いをラグナロクといいます。戦いは何十年も続き、いつ終わったのかも解っていません。西暦の終焉がはつきりしない理由は、この為です。

戦争に勝利したのは、神の軍でした。アースの子、アメリアにより人の最後の楽園ルナストファリウスは滅び、悪に満ちてしまった人は全て、滅ばされてしまいました。

人の奴隷として戦っていた、我々クロノの祖先は、人が滅びた事を知り、武器を捨てました。

それを見た神は、クロノに慈悲を与え、人がまだ良き生き物であった頃の生活を続けるならば、この地球に生きてもよいと仰られました。

こうして我々クロノは、人が残した文化を引き継ぎ、人の代わりとして、神の再編したこの世界で生きることになったのです。

歴史の授業で何千回と習った、先生の説明を無視して、俺は下層へ続くドアを探して歩き回っていた。

ゴツゴツとした瓦礫が、足下を不安定にさせるけれども、そんなことは関係ない。

「風が吹いてるから、きつとこの辺にある筈だけど…」

立ち入り禁止の札を見たのは、もう何分も前の事だ。

いつ瓦礫が崩れてきてもおかしくはない状況だが、まあ何とかなる。今までで、どうにもならなかったのは夏休みの宿題ぐらいだから。

この『第七中央研究所』は、俺達の学校の社会見学おきまりコースだ。

小学校を会わせると、ここに来るのは五回目にもなる。

『ひとぶんかけんきふつじょうしていざい人文化研究重要指定財』として登録されていて、俺の住む町唯一の観光名所だ。

ここは、人がまだ生きていた頃、あらゆるロストの研究を行なっていた遺跡で、今でも『研究所』からは貴重なロストが多く見つっている。

ロストというのは人間が残した技術だったり、道具だったり、兵器だったり、とにかく俺達クロノが未だに達成できない地点の、

遙か上をゆくテクノロジーの総称である。

クロノは神が再編したこの世界を、ロストの力を借りることで、今日まで生き残ってきたらしい。

そんな貴重なモノが埋まっている、ココ『第七中央研究所』は歴史学者や技術者の聖地とまでいわれているのだが、俺達のような一般市民には、エントランスとロビーしか見学出来ない決まりになっている。

つまりは、入って、ロビー見て、はいオシマイ。

ロストの偉大さなど毛ほども感じられない退屈スポット。

五回も見学に来る価値は、明らかにない場所だった。

そして生涯五度目の退屈に、限界を感じてしまった俺は、この遺跡をしっかりと見学すべく、一人で遺跡探検をことにしたのだった。

「あつ…行き止まり。」

瞬殺で遺跡探検は終わってしまった。

先への道が瓦礫で完全に埋まっている。もう進めない。

全くそれならば『立ち入り禁止』ではなく、『この先行き止まり』の看板を立てておけばよいのに。

「ちえつ。ブレイブでも見れるかなと思ったのに。」

もっともブレイブがこんな所に落ちていたら、一目散に軍が駆けつけて、回収してしまうのだろうけれども…。

ブレイブとはロストのなかでも、一際高度な技術が多用されている機動戦闘兵器の事を指す。

その形は様々だけど、俺が写真で見たのは人型の奴だった。父が軍の技術班で、ホントは禁止なのだが、一枚だけ写真をくれたことがある。俺の宝物だ。

ブレイブは凄く格好よいデザインと、カレッジとは比べ物にならない性能を持っている（らしい）。

ちなみにカレッジというのは発見したブレイブの模倣品の事で、こちらは数の少ないブレイブの変わりに軍の主力を担っているし、そこそこに格好もいいのだけれど、カレッジは量産型で、ブレイブにはやはり敵わないと思う。

「…戻るか。」

小石を蹴っ飛ばし、俺は、引き換えそうとした。

「そこで何をしている！」

後ろから突然大きな声がして光を当てられる。

「（見つかった！）」

咄嗟に物陰に隠れたが、遅かったのだろう。

声の主は大声で命令を繰り返した。

「隠れたって無駄だ！でて来なさい！」

僕の中を冷や汗が通りすぎていく。

立ち入り禁止区域に入った事がばれれば、学校からかなりキツイペナルティを課せられることは決定的、最悪で停学もありえた。

「（どうしよう。）」

真っ白になりかけの頭で、俺はひたすらにつまみ言い訳を考え続けていた。

第2話 下層へ

「これは違うんです！俺は、俺は、はめられたんです〜！！」

色々と考えた結果、俺は情けなくそう叫んでいた。
最悪だな。俺。

「ぷぷっ」

ライトに照らされてよくわからなかったけれど、どうやら相手は吹き出したようだった。

光を遮りながらも、必死に相手の様子を観察する。

「ヒヤハハ！ウヒッ。アハハハハ。はっ、はめられたんです！だつて。クヒヒヒッ」

「（受けた。これで見逃してくれないかな。）」

「ヒヤハハハハ！ヤバッ。お腹痛い！死ぬ〜。クハハハ。」

「（んっ？なんかこの引き笑い、聞き覚えがあるな。）」

「……もしかして、ニコか？」

「ありやりや。張れちゃった。プフッ。」

ライトを消して、よく知った顔が近づいてくる。

「こらっ！そこで何をしている！…なんちゃって。どっ？雰囲気出てた。」

「ニコ。」

彼女はニコ。俺と同じ年で、幼なじみ。さっきのはどうやら「イツの悪戯で、俺は一杯食わされたようである。」

「こんなにつまらない見学を、イチヤだけ抜け出すなんて、ずるいでしょ？だからお仕置きよ。オ・シ・オ・キ。それにしても。はめられたんですっ！だって。ヤバッ。また可笑しくなってきた。ヒヤヒビヒビヒビ。」

ムギユ！

「ふえっ？」

ムギユ！

あんまりしつこく笑うので頭にきた俺は、ニコの両頬をつねりあげる事にした。

「うににっ！いひゃい！いひゃいです！」

「このバカ女が〜」

更に力を込めて外側に引っ張るニコの目尻には涙が光る。

「ほめん！あひやまる！あひやまるから〜」

パツと手を放すとニコはしゃがんで頬をさすり始めた。

「う。女の子になんてことすんのよ。せつかくの美人が台無しだわ。」

「俺らに顔の違いは無いだろ？」

「そうだけどさあ」

俺達クロノの顔には、個性というものは存在しない。

簡単に言くと男と女、2種類の顔しかない。ということだ。

男性は浅黒い肌で、やや低目の鼻と細い目を持つ、女性はその逆で、白い肌に高い鼻、そしてぱっちりとした大きな目をしている。男は男で同じ顔。女は女で同じ顔なのだ。

昔、人という生き物は皆違う顔をし、違う声で話をし、身長もそれぞれ違い。肌の色も様々だったらしい。

神も始めはそれで良いと思っていたのだが、やがて人は、神に無断で美しい者と醜い者とを勝手に区別するようになってしまった。そして美しい者を敬い、醜い者を蔑む事を覚えてしまった。

この事を悲しんだ 神はクロノには同じ身長、同じ声、そして男と女、二種類の顔しか与えなかった。

これによりクロノは平等な種族となったのである。

という話を歴史の授業で習ったことがある。

この為に俺達は相手が誰かを顔や声で判断出来ない。分かるのは男女の違いだけだ。

多くの場合、俺達は、個人を口調や髪型で判断する事になっている。ニコはクラスで一番短く切り揃えている髪型が特徴で、口調は活発な感じ。俺、イチヤは、男にしては長めの髪の毛を後ろで止めてい

て、口調はダルそう…と皆によく言われる。

ちなみに成人は耳にピアスをしたり、髪の毛の色を染める事などで個性を主張する事ができるが、子供の内は許されない決まりになっている。

「なんだ。行き止まりだったんだねニコ。」

ニコが残念そうに俺に言った。

ニコも俺と同じで退屈を嫌う性格だ。

俺と吊るんで悪さをしては、二人揃って罰を受けることも多かった。俺にとっては気の会う友達だった。

「つまないね。やっぱり五回も来るところじゃないよ。ここはさ」

「同感だな。」

「帰りますかニイサン。」

「そうしましょう。」

ガラガラッ！

「えっ？」

不意にニコの足場が崩れ、ニコの姿がゆっくりと落ちていく。

「きゃああああ〜！」

「ニコッ!〜！」

咄嗟に飛び付いた俺と共に、崩れた足場は俺が望んだ下層へと墜ちていくのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0072i/>

ピース オブ ブレイブ

2010年10月8日13時08分発行